

武藤 禎夫 編

按古於當世

付、新古茶話雜談輕口噺

古典文庫

武藤禎夫編

按古於當世

付、新古茶話雜談輕口噺

古典文庫

平成元年十一月二十日印刷発行
非売品

編者 武藤 禎夫

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

按古於当世

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	三
按古於当世	五
序	七
凡例	八
大目錄	九
目錄(卷一、卷六)	二
卷一	三四
卷二	八

新古茶話雜談輕口噺

〔目錄〕

卷三		一四
卷四		一九
卷五		三七
卷六		四七
〔目錄〕		一九
上卷		三三
下卷		四五
解說		四八

凡 例

一、本書は、名古屋の貸本屋大惣の落晰写本『按古於当世』（国立国会図書館蔵）をできる限り忠実に翻刻し、併せて同じく名古屋の落晰写本『新古茶話雑談輕口噺』（愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫蔵）を全文紹介した。

一、翻刻にあたっては、印刷や判読の便を考え、大体次のようにした。

- (1) 漢字・仮名は、原則として現行の字体を用いた。
- (2) 仮名遣い・清濁の別（濁点の位置の誤りは正す）・振り仮名・踊り字などは、すべて底本のままとした。ただし、小文字の場合、「一ト夜」「二人リ」などはそのままとし、その他の「マア」「イヤ」などは並み字とした。
- (3) 明らかな誤記・脱字もそのまま翻字し、（○○カ）（○○脱）（ママ）などと傍記した。

- (4) 丁付が一切ないので、目録と各巻の本文ごとに、（一オ）（一ウ）のごとく洋数字の通し丁を付して、丁移りを示した。

このほか、『按古於当世』においては、

イ 底本の各巻「目録」を初めに一括した。また題名下の「（ ）」内に、既成

の類話を一話、参考として掲げた。*印のあるものは異同の大きい咄である。

ロ 句点を底本通りに付したが、読みにくい箇所は、一字アケとした。

ハ 話者名が 内にあるが、囲み枠をとり、小文字にして示した。

ニ 間々施された後人筆の注記も、参考のため、（ ）内に傍記した。

『新古茶話雑談輕口噺』については、

イ 本文の前に目録を新たに付し、題名下に先行の類話を記した。

ロ 底本には一切句読点がないため、私意によってこれを施した。

ハ 検索の便宜上、各話の題名の上に、和数字で話の通し番号を付した。

一、解説は、主として書誌的事項にとどめ、巻末に付載した。

按古於当世

文化四年序写本

序

詩に六義あり。曰風。曰賦。曰比。曰興。曰雅。曰頌。嘶にも亦六義あり。曰理屈。曰頓作。曰間違。曰龜相。曰行過。曰下掛。詩をよんで国風の善悪を知り。嘶を聞て人物の邪正を分つ。是も亦勸善懲惡の一つにして。古を（1オ）当世に按するといふ意あれば。按古於当世と名付るのミ。

文化四年卯八月

尾張 南華房撰（1ウ）

凡例

一 嘶の本。唐も日本も甚た多し。虫に喰させ書棚に充つ。其古きを去り。刊刻に出てざる新ら敷を集むといへども。予が見落して古きもあらば。見る人は是をゆるせ。

一 流行辞。流行哥。流行芝居などは。年月经ぬれば。知る者まれなり。依て是を略す。

一 下掛りの一篇。親子兄弟見る事をゆるさず。もと是を去らんとす。しかれとも。孔子詩を刪り給ふに。鄭衛を去らざれば。吾をかへり見る(2オ)戒にもなるへしと。末卷に附す。

凡例終(2ウ)

按古於當世大目錄

尾張 南華房 撰

○卷一

理屈篇

○卷二

頓作篇

○卷三

間違篇

○卷四

鹿相篇(3才)

○卷五

行過篇

○卷六

下掛篇

按古於当世大目錄終(3ウ)

按古於当世卷一

尾張 南華房撰

理屈篇目錄

十二支〔一の富・安永五・十二支〕

七福神の会〔評判の俵・天明八・福神〕

夢の売買

川東

夕霧〔御伽笑顔山・寛政頃・無題〕

千手觀音開帳〔売言葉・安永五・開帳〕

盜人儒者の家に入〔4才〕〔聞童子・安永四・學者〕

福の神貧乏神に逢ふ〔*軽口笑布袋卷四・延享四・目礼福神〕

公家の女郎かい〔*年忘嘶角力卷三・安永五・廓の本の人丸〕

料理人こん立

大根うり〔正直咄大鑑黄卷・貞享四・商人のよびくせ〕

庭鳥の鳴声〔飛談語・安永二・矮雞〕

浪人道具屋〔再成餅・安永二・鐔ミせ〕

文銭波銭の出会

蚊をすくなくする法〔千年草・天明八・蚊屋きらひ〕

念仏かい

凶年のきせるかひ（4ウ）〔*評判の俵・天明八・吉原〕

もがりいゝの侍〔*口合恵宝袋卷三・宝暦五・万病円〕

銀の猫〔聞童子・安永四・猫〕

疫神の帰国〔*夕涼新話集卷五・安永五・風の神〕

節分の夜鬼やつこに逢ふ〔*口拍子・安永二・節分〕

小僧仏に托して牡丹餅を喰ふ〔畔の落穂・安永六・小僧〕

鯉節を喰ふてちからをつよくす〔*華鬘・寛政五・忍術〕

悪眼入替所〔民和新纂・安永十・目の療治〕

なずな

日月の出会

屏風の虎（5オ）

股の癰〔*軽口新歳袋卷三・元文六・ねぶと〕

三角ずき〔譚話江戸嬉笑・文化三・菖蒲革〕

鵠

西といふ字のはんじ物〔*坂東太郎卷五・正徳五・なぞかけてはちかく〕

牡丹〔無事志有意・寛政十・蓮牡丹〕

日雇の挨拶〔聞上手二篇・安永二・鳶先生〕

釣りづき〔ママ〕〔*口拍手・安永二・うなぎ〕

おなら

古物ずき〔軽口五色紙上巻・安永三・俄乞食〕

小僧の溺死〔5ウ〕

赤ばかのなぞ〔6オ〕〔6ウ白〕〔*鯛の味噌津・安永八・赤飯〕